



「志学数学」

伊原康隆 著

シュプリンガー・フェアラーク東京

2005年4月, 159頁, 1680円 (+税)

ISBN4-431-71140-6

素晴らしい本が出た。表題は数学だが縦書きで数式はひとつも出てこない。内容は自然科学の全分野、もちろん気象学にもそっくり当てはまる。それゆえ、この欄をお借りして紹介したい。

志学とは論語に基づく若者の学問志向から転じて十五歳を意味する言葉。つまり本書は、高校生がガロアの伝記などに接して数学の世界に憧れる段階からひとかどの研究者に成長するまでの諸段階で学ぶべき様々な心得を、著者の体験をふんだんに交えて懇切丁寧に述べた本である。副題に、研究の諸段階、発表の工夫、とあるように、これから学ぶ者の身になって真剣に語りかける著者の情熱がひしひしと伝わってくる。説教臭さなど微塵もないところが如何にも清々しい。

著者の伊原康隆氏は長らく東大理学部や京大数理解析研究所の教授をつとめ、整数論の研究で平成十年度の学士院賞を受賞された斯界の大家であるが、その一方で音楽への造詣も深く、高村光太郎の詩に自ら作曲した歌曲を舞台公演で独唱されるほどの感性豊かなお人でもある。そのため文中にしばしば音楽とのアナロジーが出てくるのも本書に馥郁たる香気を添えている。

第1章は「学習と研究の諸段階、脱皮」と題し学問に興味を持ち始めたあたりからやがて研究者の道へと進む途中の心構えが著者自身の回想とともにその心理的側面をも含めて書かれてある。たとえば受験数学にあり勝ちな解法だけを覚えこんで類題を素早く解くような勉強方法を批判し「解き方を自分で見つけること」の大切さがさりげなく説かれている。専攻のレベルでは、「良い本、特に古典・原著をしっかりと読め」、「既存の問題を解くばかりでなく自分で問題を作って解いてみよ」等の正論に加え、「審美感によって真偽や重要性をかぎわける能力」とか「大切なのは才能の差よりも取り組む問題の差」など読者をドキリとさせるような名言金言が鏤められている。

第2章の「話す、聞く」では大学院生が人前で初め

て自分の成果を話す機会である研究室でのセミナーに始まって、国内の学会や国際研究集会で成果発表をするときの留意事項、さらにはプロ同士の間でのコロキウムのチェックポイントなどが著者自身の失敗体験や岡 潔氏・広中平祐氏などの大御所のエピソードも交えて実にリアルに細かく示されている。これを読んで、目から鱗の落ちる想いのする人や、そうだその通りだと思わず膝を叩く読者も多いに違いない。

同様に、第3章の「書く」では、そもそも研究論文を書いて学会誌に印刷公表することの意味・意義から丁寧に説き起こし、国際語（英語）の使い方や原稿推敲の心得、さらには投稿論文がレフェリーによってリジェクト（拒否）されたときの対処方法までが、これまた著者の経験も踏まえて極めて具体的に記されている。我々の分野でも、初めて外国のジャーナルに投稿して受理されなかったことへの不満や戸惑いを若手から聞くことがあるが、伊原氏ほどの超一流の学者でさえ若い頃には似たような苦い経験をしたことを知って自らの発奮材料としてくれたらまさに良薬である。

そしてまた、このような論文評価の過程に見られる異文化圏の研究者の思想・態度に対する著者の厳しい批判と暖かい理解が文章の随所に滲み出ているあたりも見逃してはなるまい。

世間には「学会講演の仕方」とか「英語論文の書き方」といった類のマニュアル本、ハウツーものは数多く見られるが、本書はそれらとは全く違って、本当に血の通った教本である。とにかくこれほどまで親切に若い研究者の立場を思い遣った道案内は評者の知る限り稀有である。言うまでもなく懇切丁寧とは手取り足取りの甘やかしではない。時には若者の自力に任せる突き放した言い方もまた、著者の学問に対する深い愛情の現れと読むべきであろう。まえがきによると本書は著者が東大や九大での集中講義で話した内容を根底に書かれたものであるという。このような情熱を持った指導者の警咳に接することの出来た数学分野の若い大学院生たちは本当に幸せであると思う。

本書は、気象学を志す学生、研究の世界に足を踏み入れた大学院生、学位を得て一人歩きを始めた新進の研究者、そして指導的立場にある人、すべてに夫々の立場から座右の銘として熟読して頂きたい良書であると信じ推薦する次第である。 (廣田 勇)